

長岡京跡右京第1205次調査報道発表資料

1 はじめに

本調査は、長岡京市新庁舎建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、長岡京右京五条二坊五町および五条大路推定地、開田古墳群、複合遺跡である開田遺跡にあたる。調査地付近は現在の長岡京市本庁舎に伴う造成によって平坦な地形となっているが、旧地形は西から東へと傾斜する緩扇状地に位置する。

本調査地周辺では既に多くの調査が実施されている。特に、東へ約150mの地点で平成8年度に実施された右京第554次調査では、長岡京の五条大路北側溝や平安時代の掘立柱建物跡が検出された。また、北へ約250mの地点で平成3年に実施された右京第376次調査および平成20年度に実施された右京第954次調査では、古墳時代後期の一辺10m前後の方墳が10基以上検出されているほか、円筒埴輪や朝顔形埴輪、形象埴輪（家形、鶴形、馬形、甲冑形、盾形等）が出土しており、開田古墳群の広がりが確認されている。

今回の調査では、長岡京右京五条二坊五町宅地の利用状況や開田古墳群の南限に関わる成果が期待されている。

調査期間：令和2年2月12日～8月31日（予定）

調査面積：約1,373m²（予定）

本調査は1期、2期に分かれる。

1期調査：令和2年2月12日～3月26日（終了）

2期調査：令和2年4月2日～8月31日（予定）

本説明会は主に2期調査の成果を報告する。

2 調査の概要

本調査では、長岡京期から近世に至る遺構および遺物を検出した。以下に主な遺構を紹介する。ただし、遺物整理作業中のため、詳細な時期は不明なものもある。

近世

① 近世耕作溝

地表面下約1mで近世の遺構面を確認した。耕作に伴うとみられる溝跡が多数検出された。主軸を北に対しやや東へ振る南北方向の溝で、埋土からは土師器片等のほか染付椀の細片が出土した。当該期は耕作地として利用されていたとみられる。

中世

① 集石遺構 SK04

調査区南辺中央部で検出した土坑である。東西約1.3m、南北約0.6mを測り、平面橢円形を呈す。土坑内部には拳大の石が敷き詰められており、土坑の形状に合わせて打ち欠いたとみられるものも存在する。また、周辺にはSK04を中心とするような小穴群が検出されており、墓堂あるいは祠堂などの建物を伴う遺構となる可能性がある。集石上面から出土した瓦器碗片から鎌倉時代初頭の遺構と考えられる。

② 中世の小穴群

調査区南西隅部で検出した直径0.12m～0.3m前後の小穴群である。攪乱が多く建物として復元は難しいが、多くの小穴から土師器片や瓦器片が出土したほか、P27からは鎌倉時代初期の瓦器碗片とともに白磁の碗の底部が出土した。周辺に生活に伴う何らかの建物群が展開していたとみられる。

平安時代

① 掘立柱建物 SB33・柵列 SA94

調査区北東部で検出した掘立柱建物跡と柵列である。SB33は東西3間、南北2間以上の身舎に1間の南面廂を持つ。柱間距離は東西約4.5m等間、南北約4.7m等間で全体では東西約13.5m、南北14m以上を測る。主軸は北に対し2°東へ振る。SA94はSB33に並行する東西方向の柵列である。柱間距離は4.5m～5.5mで全体では東西約20mを測る。SB33の柱穴からは黒色土器A、緑釉陶器などが、SA94の柱穴からは平安京池田瓦窯出土軒平瓦と同型の軒平瓦が出土しており、これらの遺構は平安時代中期～後期のものとみられる。

② 掘立柱建物 SB70・SB110

調査区南東部で検出した掘立柱建物群である。SB70は東西4間、南北2間の縦柱建物と考えられ、北側に廂または縁をもつ。柱間距離は東西が約2.4m等間、南北が約2.35m等間で廂または縁部のみ南北が約1.45mを測り、全体では東西約9.6m、南北約6.15mを測る。また、SB70の北約2.3mに柱筋の通る東西2間、南北1間の掘立柱建物があり、関連性があるものと思われる。SB110は東西1間、南北4間の掘立柱建物であるが東側調査区外へ延伸する可能性がある。検出部分での柱間距離は東西約2.2m、南北約2.1m等間で全体では南北約8.4mを測る。SB70とSB110はともに主軸を北に対し2°西へ振るため、同時代の建物とみられるが、一部重複があり柱間距離にも違いがあるため併存はしていなかったものと考えられる。柱穴から出土した土師器や黒色土器A・Bなどから平安時代中期～後期に収まるものとみられるが、建物軸の違いから①のSB33・SA94とは時期を異にしていると考えられる。

長岡京期

① 五条大路北側溝 SD01

残存状態の良好な東半部で幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。右京第496次調査で検出された条坊側溝と国土座標のX座標値がほぼ同じであり、当該遺構の延長部であるとみられる。大路条坊側溝でありながら遺物がほとんど出土していない。西端部では削平のためほとんど残存しておらず、旧地形が西から東へ下がっていたことを示唆する。

3 まとめ

今回の調査では、主に長岡京期と平安時代中期～後期、鎌倉時代初期、近世の土地利用の変遷を知る手掛かりを得ることができた。以下に主な成果をまとめると、

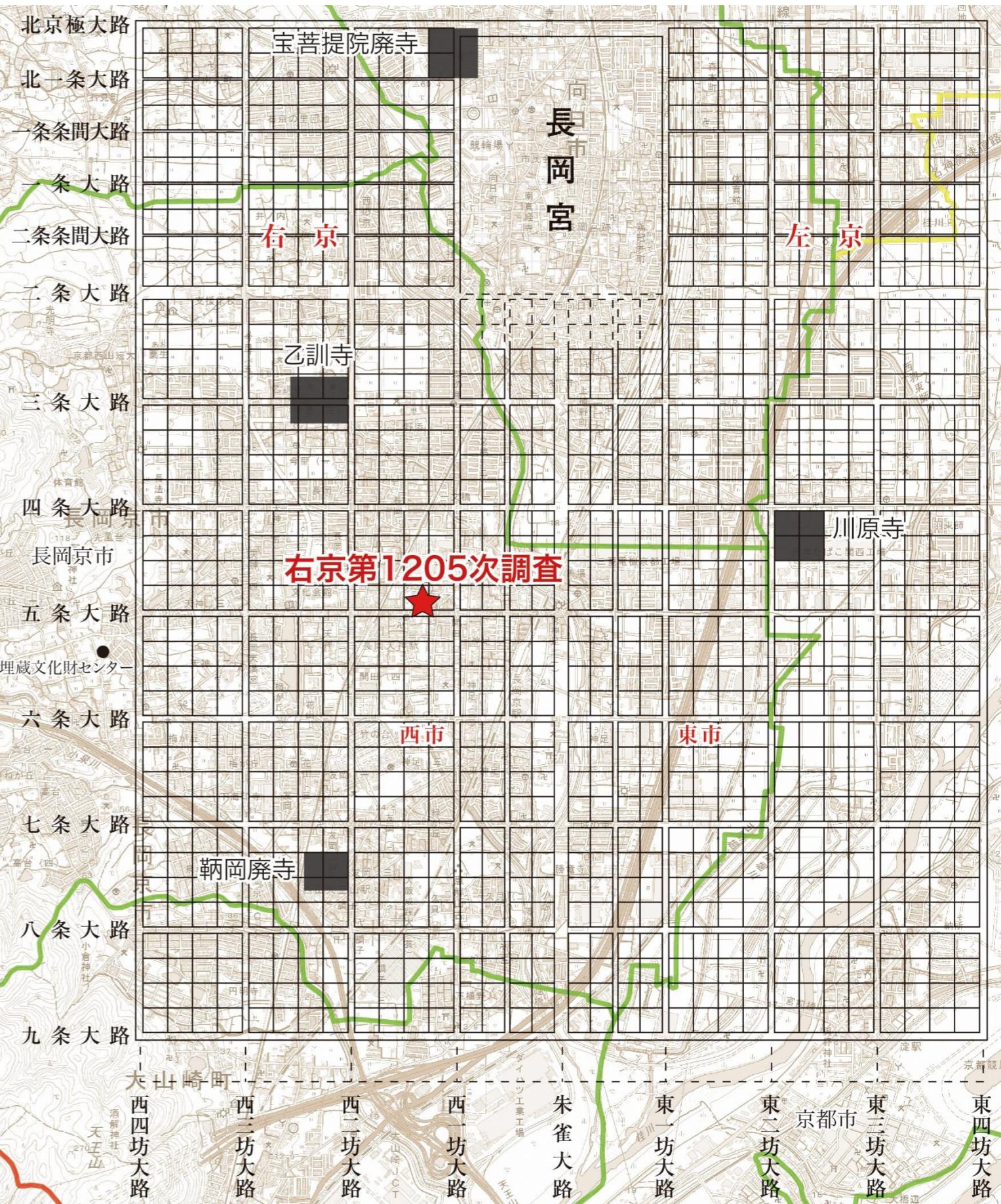
- ①長岡京期は、五条大路の北側溝が検出されたが、遺構埋土から遺物の出土が少なく、宅地側からも当該期と特定できる遺構が検出されなかつたことから、区画としては整備されていたものの、住居が建ち並ぶような居住域としては利用されていなかつた可能性が高い。
 - ②平安時代中期～後期は、調査区東半に掘立柱建物群が展開しており、廂を持つ建物や柱穴列から綠釉陶器片や瓦が出土していることから、何らかの施設があつたと考えられる。SA94 の柱穴から出土した軒平瓦は平安京池田瓦窯出土軒平瓦と同型であるが、この瓦に綠釉を施したタイプのものが仁和寺から出土している¹。宇多法皇（867-931）に関連する史料には仁和寺開田院の名が見え²、当該建物群が寺院に関連する施設である可能性も検討する必要がある。
 - ③平安時代末～鎌倉時代初期は、調査区西半に土師器や瓦器を伴う小穴群や建物を伴う可能性がある集石遺構が展開しており、居住域・生活域として利用されていたと考えられる。
 - ④近世は、耕作に伴うとみられる溝跡が多数検出されており、耕作地・生産域として利用されていたものとみられる。

¹ 植山 茂「平安時代中期の官瓦窯について」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999

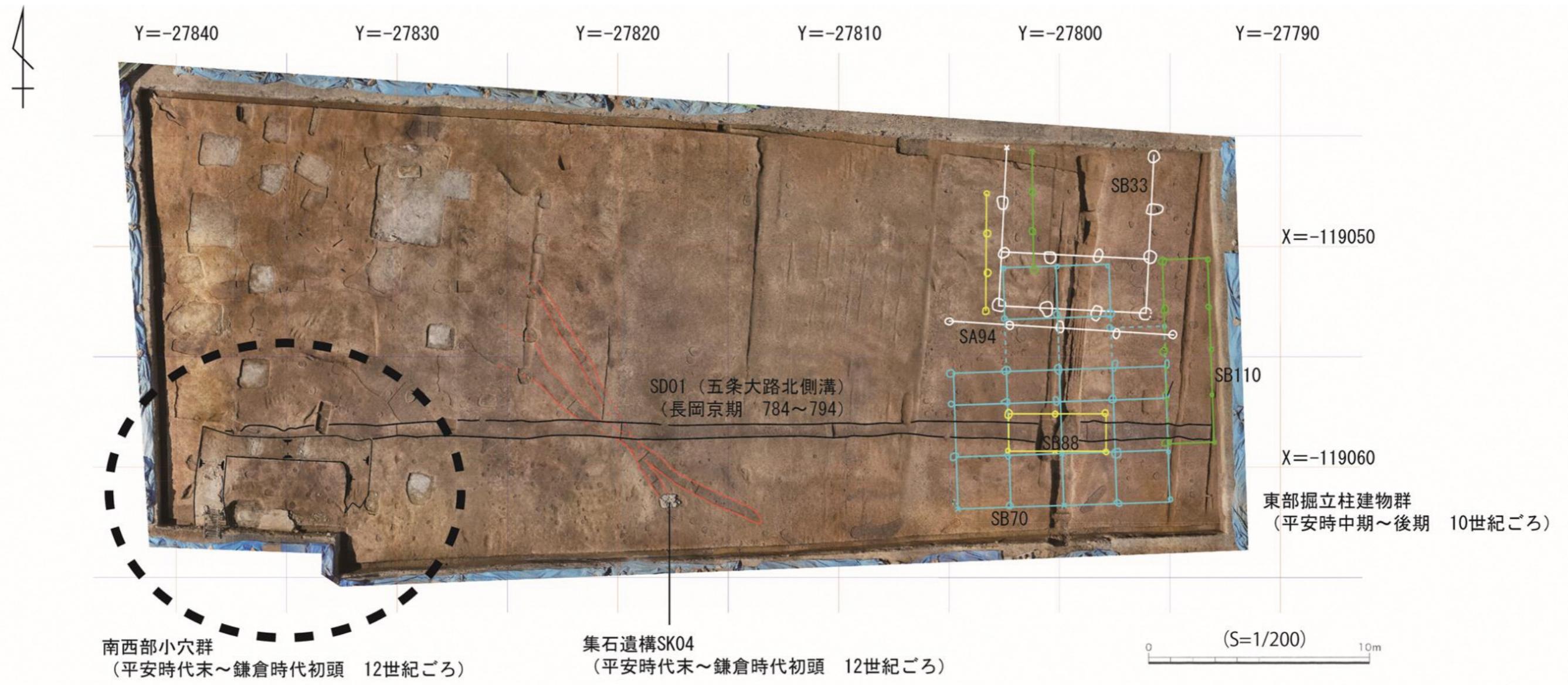
² 原 秀樹「新たな土地利用」『長岡市史本文編一』長岡市史編さん委員会 1996



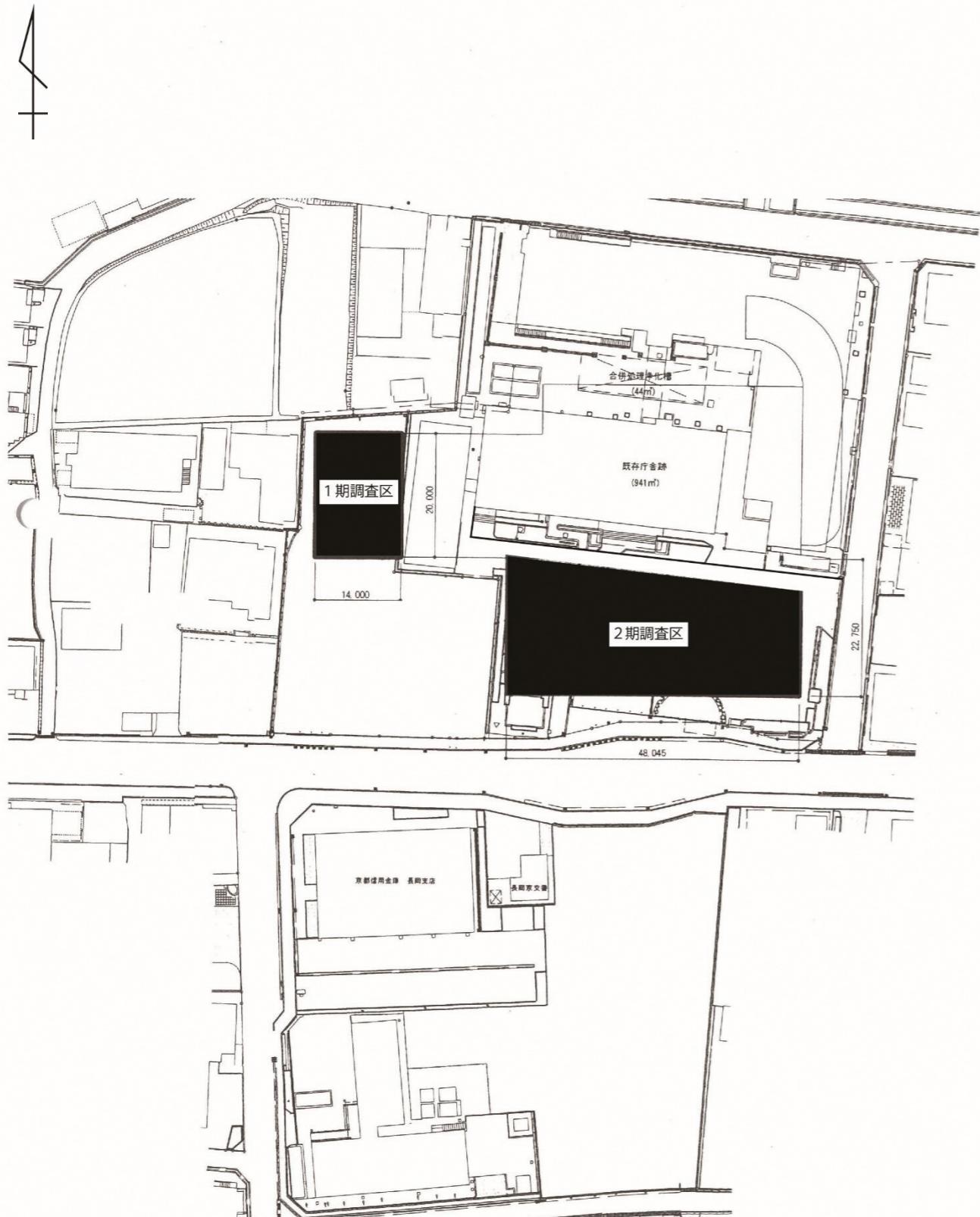
五条大路北側溝検出作業状況



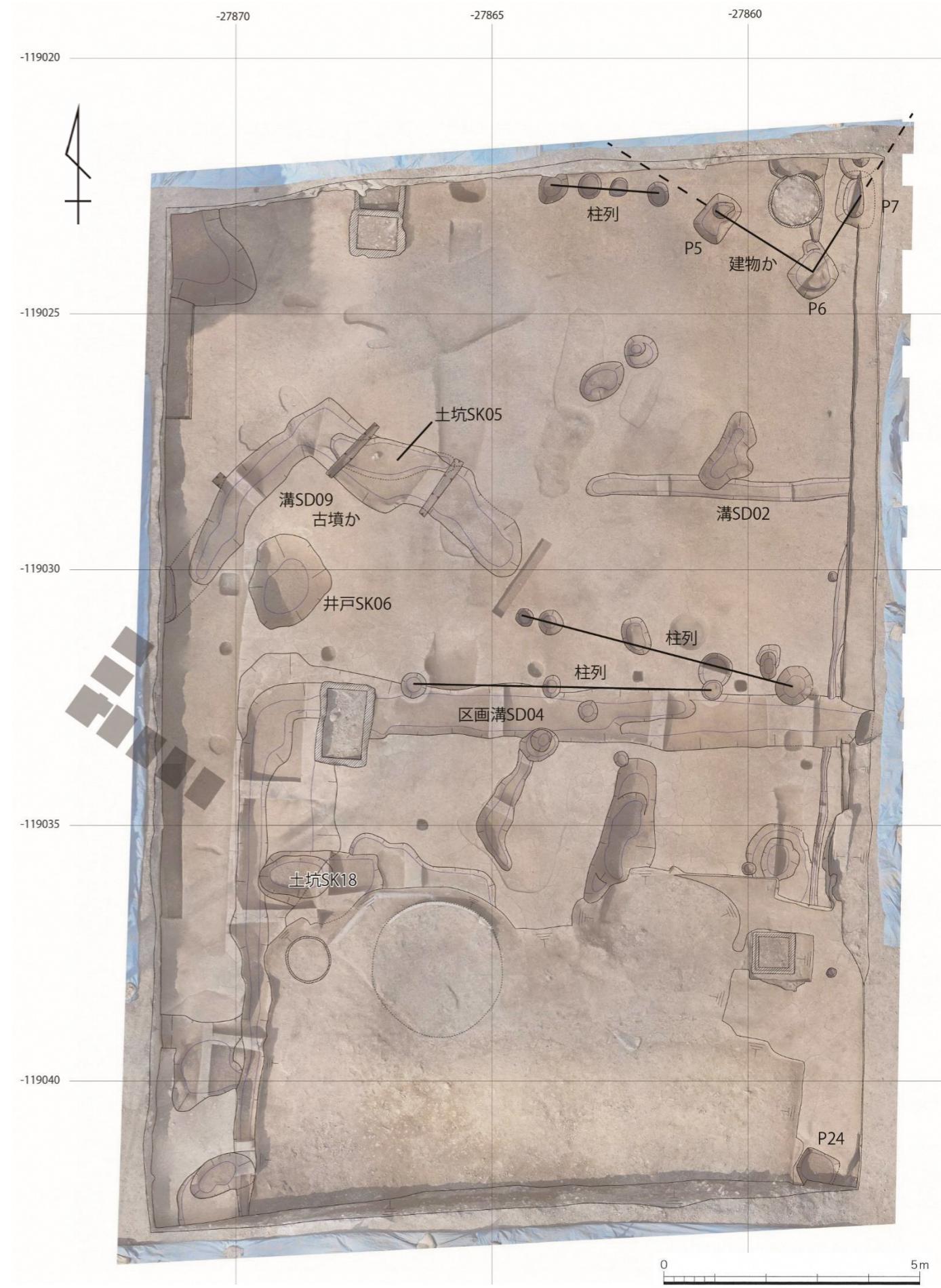
調査地位置図 (S=1/25000)



参考資料



調査区配置図



1期調査区遺構平面図